

授業科目 (科目ID)	言語発達障害 I		担当教員 (実務経験)	小屋 雄二 有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 発達支援センター及びことばの教室にて20年勤務。		
対象年次・学期	1年・前期		必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	講義・演習		授業回数(1回90分)	15回	時間数	30時間
授業目的	言語発達障害について、その要因としての各障害の概要を学ぶ。					
到達目標	ことばは、周囲の人・物・音・光など環境からの刺激を受け、聴覚や視覚などの感覚器、発声発語の運動機能、脳機能などが年齢とともに成熟することにより発達してくるものである。したがって、子どもの側にその成熟を遅らせる要因、すなわち発達障害があれば、言語発達は遅れてしまう。又、それらの機能の成熟を促すための環境に問題があっても、言語発達は遅れてしまう。この授業では、標準的な言語発達を基盤として、それに基づく各障害を理解するための基礎を学ぶことを目標としている。					
テキスト・参考図書等	(教)「図解 やさしくわかる言語聴覚障害」 著者名:小嶋知幸 発行所:ナツメ社 (参)「言語聴覚士テキスト 第3版」 著者名:大森孝一 発行所:医歯薬出版					
評価方法・評価基準		評価割合(%)	評価基準			
	試験	90%	左記の評価割合で総合評価を行う			
	レポート	10%				
	小テスト	%				
	提出物	%				
その他	%					
履修上の留意事項	他者を気にせず、質問を通してより授業が深化する方向で授業に臨むこと。					
履修主題・履修内容	回数	履修主題	履修内容			
	1	発達とは	自己紹介、発達とは			
	2	言語発達障害とは	障害、言語発達の阻害要因			
	3	標準的なことばの発達	言語発達を支える基盤			
	4	基本情報の収集	情報収集の方法(面接法)・母子健康手帳			
	5	早期発見・早期療育	母子健康手帳・乳幼児健康診査			
	6	早期発見・早期療育	スクリーニング検査			
	7	知的障害	症状と定義			
	8	知的障害	癲癇とその対応			
	9	自閉症スペクトラム障害	症状と定義			
	10	自閉症スペクトラム障害	武蔵野東学園の教育			
	11	脳性麻痺	症状と定義			
	12	特異的言語発達障害	症状と定義			
	13	学習障害	症状と定義、ディスレクシア			
	14	学習障害	CARD演習			
15	注意欠如・多動性障害、療育支援	ADHDの症状と定義、地域支援・家族支援について				

授業科目 (科目ID)	言語発達障害Ⅱ	担当教員 (実務経験)	佐々木 勇輝 有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 道内児童福祉施設にて言語聴覚士として6年間勤務		
対象年次・学期	1年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	講義・演習	授業回数(1回90分)	15回	時間数	30時間
授業目的	知的障害・コミュニケーションについて学ぶ。検査演習を用いて、評価の方法について学び、子どもに関わる言語聴覚士のイメージを掴む。				
到達目標	① 知的障害とは何か、歴史、定義、原因、発達特性について概観する。 ② 知的障害児の言語・コミュニケーションの特徴について理解する。 ③ 知的障害児の評価の仕方について理解する。 ④ 認知、言語面に関する指導法を理解する。				
テキスト・ 参考図書等	(教)標準言語聴覚障害学 言語発達障害学 第2版 著者名:藤田郁代 発行所:医学書院				
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80%	定期試験と小テスト、提出物を合わせて評価する。		
	レポート	%			
	小テスト	15%			
	提出物	5%			
	その他	%			
履修上の 留意事項	欠席しないこと、復習をすること。				
履修主題・ 履修内容	回数	履修主題	履修内容		
	1	知的障害とは	歴史、定義、原因		
	2	正常発達について	言語・社会性・コミュニケーション・運動発達		
	3	正常発達・知的障害児の特徴	言語発達の過程、認知及び象徴機能の遅れ		
	4	知的障害児の特徴	言語理解・表出・全般的な発達の遅れ		
	5	知的障害の原因	出生前のスクリーニング検査、染色体異常等		
	6	ビデオ鑑賞	アイアムサム鑑賞		
	7	知的障害の評価	情報収集、インテークシートの書き方		
	8	知的障害の評価	知能検査の種類、適用年齢等		
	9	知的障害児の支援	指導・支援を考える上でのポイント		
	10	知的障害児の支援	個別指導とグループ指導、マトリックス法、S-S法、プレイセラピー等		
	11	知的障害児の支援	家族支援について		
	12	知的障害児の支援	乳幼児期の支援(乳幼児健診と療育システム、AAC)		
	13	知的障害児の支援	学童期の支援(特別支援教育、インクルーシブ教育)		
	14	知的障害児の支援	児童福祉法、療育手帳について		
15	国家試験	国家試験問題を解く			

2023年度

専門学校北海道リハビリテーション大学校

言語聴覚学科

授業科目 (科目ID)	言語発達障害演習 I		担当教員 (実務経験)	佐々木 勇輝 有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 道内児童福祉施設にて言語聴覚士として6年間勤務		
対象年次・学期	1年・後期		必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	講義・演習		授業回数(1回90分)	15回	時間数	30時間
授業目的	言語発達障害の評価の目的と方法について理解する。 幼児期の児童との関わり方について学ぶ。					
到達目標	心理検査(知能検査、発達検査、言語検査)ができる。					
テキスト・ 参考図書等	(教)言語聴覚士のための臨床実習(小児編) 著者名:深浦順一 発行所:建帛社 (参)改訂版 心理検査の実際 著者名:澤田 丞司著 発行所:新興医学出版社					
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準			
	試験	80%	筆記試験と小テスト、提出物で評価する。			
	レポート	%				
	小テスト	15%				
	提出物	5%				
	その他	%				
履修上の 留意事項	欠席しないこと、復習すること。					
履修主題・ 履修内容	回数	履修主題	履修内容			
	1	心理検査	ガイダンス、心理検査の目的と位置づけ			
	2	知能検査	田中ビネー知能検査V			
	3	知能検査	田中ビネー知能検査V			
	4	知能検査	グッドイナフ人物画知能検査			
	5	発達検査	遠城寺式乳幼児分析的発達検査			
	6	言語検査	S-S法言語発達遅滞検査			
	7	言語検査	S-S法言語発達遅滞検査			
	8	言語検査	LCスケール			
	9	言語検査	質問応答関係検査			
	10	言語検査	PVT-R絵画語い発達検査			
	11	心理検査	S-M社会生活能力検査			
	12	心理検査	Vineland-2適用行動尺度、乳幼児精神発達診断法など			
	13	保育園実習	健全発達を念頭におき、保育園にて各年齢の児童と関わる			
	14	保育園実習	健全発達を念頭におき、保育園にて各年齢の児童と関わる			
15	心理検査に関係する国家試験問題	国家試験形式問題を解く				

2023年度

専門学校北海道リハビリテーション大学

言語聴覚学科

授業科目 (科目ID)	構音障害 I		担当教員 (実務経験)	阿部 由美 有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 言語聴覚士として市内病院にて14年、訪問看護ステーションにて4年勤務		
対象年次・学期	1年・後期		必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	講義・演習		授業回数(1回90分)	15回	時間数	30時間
授業目的	運動障害性構音障害のタイプ分類や発生機序を学ぶ。また、タイプ別の発話特徴を理解する。					
到達目標	運動障害性構音障害の発生機序を理解する。タイプ分類ができる。					
テキスト・ 参考図書等	言語聴覚士のための運動障害性構音障害					
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準			
	試験	80%	定期試験80%、小テスト20%			
	レポート	%				
	小テスト	20%				
	提出物	%				
	その他	%				
履修上の 留意事項	欠席せず、予習復習をすること。					
履修主題・ 履修内容	回数	履修主題	履修内容			
	1	運動性構音障害とは	構音障害と高次脳機能障害			
	2	運動性構音障害とは	定義と種類 STの役割			
	3	ことばの産生と仕組み	発声・構音器官の構造(呼吸器系)			
	4	ことばの産生と仕組み	発声・構音器官の構造(呼吸器系)			
	5	ことばの産生と仕組み	発声・構音器官の構造(喉頭)			
	6	ことばの産生と仕組み	発声・構音器官の構造(喉頭)			
	7	ことばの産生と仕組み	発声・構音器官の構造(付属管腔)			
	8	ことばの産生と仕組み	発声・構音器官の構造(付属管腔)			
	9	ことばの産生と仕組み	ことばの神経機構			
	10	運動性構音障害の病態	運動性構音障害の分類			
	11	Dysarthriaの原因疾患	錐体路、錐体外路、小脳、脳血管疾患、変性疾患			
	12	Dysarthriaの原因疾患	錐体路、錐体外路、小脳、脳血管疾患、変性疾患			
	13	タイプ分類と疾患	痙性構音障害、弛緩性構音障害、失調性構音障害、運動低下性／過多性構音障害、混合性構音障害			
	14	タイプ分類と疾患	痙性構音障害、弛緩性構音障害、失調性構音障害、運動低下性／過多性構音障害、混合性構音障害			
15	タイプ分類と疾患	痙性構音障害、弛緩性構音障害、失調性構音障害、運動低下性／過多性構音障害、混合性構音障害				

授業科目 (科目ID)	摂食嚥下障害 I		担当教員 (実務経験)	松山 大輔 有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 道内急性・回復期病院で言語聴覚士として5年間勤務		
対象年次・学期	1年・後期		必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	講義		授業回数(1回90分)	15回	時間数	30時間
授業目的	摂食嚥下障害に関する基本的概念を学ぶ。基礎知識や理論を学び、理解する					
到達目標	・摂食嚥下に関する神経、筋を含む構造を理解できる ・摂食嚥下モデルを説明できる ・摂食嚥下障害の原因疾患や病態を説明できる					
テキスト・ 参考図書等	(教)脳卒中の摂食嚥下障害 第3版 著者名:藤島一郎 谷口洋 発行所:医歯薬出版 (教)嚥下障害ポケットマニュアル 第4版 著者名:聖隷嚥下チーム 発行所:医歯薬出版					
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準			
	試験	80%	定期試験と小テストの結果から評価する			
	レポート	%				
	小テスト	20%				
	提出物	%				
	その他	%				
履修上の 留意事項	・配布プリントおよび教科書の予習復習をすること ・アクティブラーニングの一環としてグループワークを取り入れる。積極的に参加すること					
履修主題・ 履修内容	回数	履修主題	履修内容			
	1	摂食嚥下障害とはなにか	オリエンテーション、摂食嚥下の定義			
	2	嚥下のメカニズムについて	嚥下器官の解剖			
	3	嚥下のメカニズムについて	嚥下の5期モデル、プロセスモデル			
	4	嚥下のメカニズムについて	嚥下に関与する筋(1)			
	5	嚥下のメカニズムについて	嚥下に関与する筋(2)			
	6	嚥下のメカニズムについて	嚥下に関与する神経、グループワーク			
	7	嚥下のメカニズムについて	咽喉頭感覚、嚥下中枢、大脳の関与			
	8	摂食嚥下障害の原因	摂食嚥下障害の原因疾患・責任病巣(1)			
	9	摂食嚥下障害の原因	摂食嚥下障害の原因疾患・責任病巣(2)、グループワーク			
	10	障害のとらえ方とリハビリテーション	障害の考え方とICFについて			
	11	障害のとらえ方とリハビリテーション	評価とリハビリテーションの考え方			
	12	嚥下の年齢的变化	小児・成人・高齢者の嚥下			
	13	嚥下障害と呼吸器疾患	呼吸と嚥下 不顕性誤嚥と誤嚥性肺炎			
	14	嚥下障害と呼吸器疾患	呼吸器疾患からみた嚥下障害			
15	老化と嚥下障害	栄養障害、フレイル				

2023年度

専門学校北海道リハビリテーション大学校

言語聴覚学科

授業科目 (科目ID)	聴覚障害 I		担当教員	佐々木 勇輝	
			(実務経験)	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 道内児童福祉施設にて言語聴覚士として6年間勤務	
対象年次・学期	1年・通年		必修・選択区分	必修	単位数 2単位
授業形態	講義・演習		授業回数(1回90分)	20回	時間数 40時間
授業目的	「きこえる」とはどういうことを考え、聴覚障害成人を対象とした臨床活動について理解を深める。				
到達目標	・聴覚障害について理解し、その種類と特性に応じた検査・評価・訓練の基礎を学ぶ。・聴覚障害者のコミュニケーション指導・支援方法を理解する。				
テキスト・ 参考図書等	(教) 聴覚障害学 第3版 発行所: 医学書院				
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	80%	定期試験と小テストで評価する。		
	レポート	%			
	小テスト	20%			
	提出物	%			
	その他	%			
履修上の 留意事項	欠席せず、復習をすること。				
履修主題・ 履修内容	回数	履修主題	履修内容		
	1	聴覚障害について学ぶ	オリエンテーション、音とはなにか、「きこえる」ということ		
	2	聴覚系の構造を学ぶ	伝音系(外耳・中耳)の解剖と機能		
	3	聴覚系の構造を学ぶ	伝音系(外耳・中耳)の解剖と機能		
	4	聴覚系の構造を学ぶ	感音系(内耳・中枢)の解剖と機能		
	5	聴覚系の構造を学ぶ	感音系(内耳・中枢)の解剖と機能		
	6	難聴の分類	伝音難聴、感音難聴、混合難聴		
	7	難聴と併発する症状	めまい、耳鳴、聴覚過敏、耳閉塞感、補充現象		
	8	難聴の原因疾患	難聴の原因と発症時期		
	9	難聴の原因疾患	難聴の原因と発症時期		
	10	成人聴覚障害	老人性難聴、後天的聴覚障害		
	11	聴覚検査と評価	・各種聴覚検査 ・オージオグラムの読み方 ・新生児聴覚スクリーニング		
	12	聴覚検査と評価	・各種聴覚検査 ・オージオグラムの読み方 ・新生児聴覚スクリーニング		
	13	言語・コミュニケーションの検査と評価	関連情報の収集、コミュニケーション、心理面の評価		
	14	障害受容、環境調整	相談、助言、環境調整		
15	障害受容、環境調整	相談、助言、環境調整			

履修主題・履修内容	回数	履修主題	履修内容
	16	聴覚系の構造を学ぶ	伝音系(外耳・中耳)の解剖と機能
	17	聴覚系の構造を学ぶ	感音系(内耳・中枢)の解剖と機能
	18	難聴の分類	伝音難聴、感音難聴、混合難聴
	19	難聴と併発する症状	めまい、耳鳴、聴覚過敏、耳閉塞感、補充現象
	20	難聴の原因疾患	難聴の原因と発症時期

授業科目 (科目ID)	聴覚検査法 I		担当教員 (実務経験)	岡崎 聡子 市内大学病院で13年、市内総合病院で8年言語聴覚士として勤務		
対象年次・学期	1年・後期		必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	講義・演習		授業回数(1回90分)	15回	時間数	30時間
授業目的	言語聴覚士が実施する代表的な検査の、目的・手順を学び、結果の分析を通して、聴覚障害の有無、タイプとの関係などの理解を深める。聴覚機能の鑑別診断に必要な評価法(自覚的、他覚的、乳幼児)を習得する。					
到達目標	・聴覚検査の臨床的な意義を知る・標準純音聴力検査の手順について学び実践できる ・インピーダンスオージオメトリについて手順を学び実施できる					
テキスト・参考図書等	(教)聴覚検査の実際 第4版 南山堂					
評価方法・評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準			
	実技試験	70%	・実技試験と小テストにて評価			
	レポート	%				
	小テスト	30%				
	提出物	%				
その他	%					
履修上の留意事項	聴覚検査は、単に聞こえるか聞こえないかの判断だけではなく、多くのことがわかる。検査に慣れると面白さがわかるので積極的に検査機器に触れること。					
履修主題・履修内容	回数	履修主題	履修内容			
	1	聴覚検査の予備知識	検査をするにあたっての心構え、オージオメーターの取り扱い			
	2	純音聴力検査	標準純音聴力検査の目的、気導聴力検査			
	3	純音聴力検査	オージオグラムの形式、読み方			
	4	純音聴力検査	気導聴力検査			
	5	純音聴力検査	気導聴力検査			
	6	純音聴力検査	気導聴力とマスキング			
	7	純音聴力検査	骨導聴力検査			
	8	純音聴力検査	骨導聴力とマスキング			
	9	インピーダンスオージオメトリ	オージオメトリの目的、臨床的応用			
	10	インピーダンスオージオメトリ	ティンパノメトリの準備と手順			
	11	インピーダンスオージオメトリ	耳小骨筋反射検査の準備と手順			
	12	インピーダンスオージオメトリ	検査結果の判定			
	13	耳管機能検査	原理と方法			
	14	耳鳴検査	耳鳴の機序、検査の手順			
15	選別聴力検査	乳幼児、児童、成人の選別検査について				

授業科目 (科目ID)	臨床実習 I	担当教員 (実務経験)	佐々木 勇輝 有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 道内児童福祉施設にて言語聴覚士として6年勤務		
対象年次・学期	1年・後期	必修・選択区分	必修	単位数	1単位
授業形態	実習	授業回数(1回90分)	20回	時間数	40時間
授業目的	臨床における言語聴覚療法を見学し言語聴覚士の職務や役割を理解する。				
到達目標	言語聴覚士の業務や役割、職務について理解する。				
テキスト・ 参考図書等	特に指定はしない				
評価方法・ 評価基準	評価方法	評価割合(%)	評価基準		
	試験	%	臨床教育者による評価と学科教員の評価を合わせて評価する。		
	レポート	%	評価項目(実習施設) 1. 医療者としての基本的態度の習得 2. STとなるために必要な医学的知識・障害像の理解や職業理解の習得 3. スタッフや患者様とのコミュニケーションスキルの向上		
	小テスト	%	評価項目(学校) 1. 実習前準備 2. 提出物 3. 実習後の発表		
	提出物	%	実習施設70%、学校30% 200点満点中120点以上を合格とする。		
	その他	100%			
履修上の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・対象者の障害、体調、心理状態に配慮しながら思いやりを持って、丁寧な対応を心がけること。 ・臨床教育者を通して実習の目的が達成できるように、積極的に臨むこと。 				
履修主題・ 履修内容	回数	履修主題	履修内容		
	1~20	臨床実習 I (1週間)	<p>実習内容</p> <p>臨床における言語聴覚士の役割と立場を理解し、数種類の言語聴覚療法を見学及び体験する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.積極的に参加する 2.病院施設の業務等について学ぶ 3.記録・報告について学ぶ 4.見学による言語聴覚士の役割と職務の理解 5.職業人としてのルールやマナーを学ぶ 		

